

伊藤若冲筆「動植綵絵」研究

田島 菜摘 (学習院大学)

伊藤若冲 (1716-1800) 筆「動植綵絵」は、絵師の畢生の大作として称され、濃密濃彩描写や形態の反復・充填、重力の不在感や散漫な画面印象、奇矯なモチーフ構成などがその様式として挙げられてきた。しかし、およそ宝暦8年 (1758) 頃~明和3年 (1766) 頃までの約10年の歳月をもって描かれた30幅は、前中後期の大きく3期に分けた制作期ごとに様式や選択モチーフ、構成法は異なっている。本発表では、一見混沌とした30幅の寄せ集めとみられる「動植綵絵」を体系付けて論じ、一幅ごとにさまざまな性質を發揮しながらも、一貫した若冲様式を見事に表現している点を考察する。またこの考察を通して、既存の絵画の常識におさまらない絵画の可能性を追求した遊戯性を改めて取り上げる。若冲作品は、即物写生だけでなく先行研究において中国・朝鮮絵画模写や版本学習などからの影響が指摘されているが、さらに染織工芸との関係性について、議論を進展させる資料を示したい。

その方法として、前中後期それぞれの作品の性質を明らかにする制作3期による分類に併せて、モチーフの画面構成法にはどのような傾向があり、どの時期に分布するものなのか確認する。制作期によってその性質は大きく異なるように見えるが、先行する性質を受け継ぎながら豊かな変容を遂げる点が見逃せない。

そして、この分析から導き出されたモチーフが画面を埋め尽くす増殖性に注目する。この増殖性とは、植物が大きく伸長し花や葉を繁茂させる有機的増殖性と、類似する形態を反復させる無機的増殖性とに分けることができる。これらは単一モチーフの増殖であり、より複雑に応用させた増殖も指摘できる。画中の主役である鳥と脇役の花々の形態・色彩が、モチーフの境界線を越えて連続するメタモルフォーゼ、いくつかの相似的な呼応関係にある形態を組み合わせたミラーイメージ、「動植綵絵」以前の若冲初期作品からモチーフを抜き出し新たな一幅に仕立て上げたモンタージュなどである。繁縷で執拗な充填様式は、画面のまとまりを弱め、絵画的な趣には欠けるとも言えるが、挑戦的な試みを巧みな計算で成功させている。

「動植綵絵」以前の際立った増殖性を見せるモチーフとして「雪中遊禽図」中の水仙に注目する。線状の葉が叢生し、せわしなく曲線を描いて揺れるさまは、周辺諸派では類例を見出しにくい。正徳4年 (1714) 初版の『雛形祇園林』中巻72番に見られた図案に酷似する形態がある。さらに「燕子花小禽図」の蔓化した茎の表現は、小袖模様などに見られる本来蔓性ではない植物の唐草文様と通じる性質を持ち合わせている。若冲と染織図案の直接の影響関係を証明することはできないが、形態の共通性を挙げることで、若冲様式の源泉をたどる一つの可能性として論じたい。